6. 5 きる：アンケート抄-Q. 下着について感じること

facebook「とある民俗学講師の補足メモ」

- ・誰がための下着：異性のため、同性のため、自分のため？→「社会的事実」としての下着
- ・身体のポリティクス：投票という選択／貨幣という選択／慣習行動という選択

【暑さ・寒さ】中学の頃、札幌に住んでいた私は、冬にヒートテックを着る習慣があった。北海道の冬は寒いので、防寒という観点からみれば有用なものであった。しかし、屋内は暖房が効いて暑かったため、汗かき体質の私は、汗でヒートテックが肌にくっつく感覚を不快に思い、以降はスキー時以外はヒートテックは着用しなくなった。

【購買環境】私の地元は田舎なので、中高生が好むようなかわいい下着を買うには10数キロ先のショッピングモールに自家用車で行く必要があった。必然的に母と一緒にだった。女性用下着のショップの中には色もサイズも様々のアンダーウェアが所狭しと並んでいる。中高と制服で登校していた当時の私にとって、ささやかなおしゃれとも言うべきそれらを買っていくのは楽しかった。しかし、如何せん母同伴なので、やや派手な下着に対してこれカワイイねと言っただけで「そんなの誰に見せるの？」と返された。見せるかどうかではなく自己満足だと私は思うのだが、娘の下着に母は心中穏やかでないらしい。結局地味な色やデザインのものを着けることになり、私はもっとカワイイのがいいなと思っていた。

【世代差】下着ブランドというとワコールを思い浮かべる。母によると、私は3歳頃からワコールどっぶりだったそうだ。小学校高学年頃からサイズを測ってもらい、下着を自分で選んで祖母に買ってもらうようになった。そのおかげか下着で不快に感じたことはほとんどない。とはいえ、昔の下着もそう悪いものではなかったようで、1943年生まれの祖母によると、肌に直に履くのは木綿のズロースと呼ばれるもので、通気性が良く、ズロースとブラジャーの上にはスリッパと呼ばれるものを着て、その上から衣服を着たそうだ。会ったことはないが1907年生まれの曾祖母は、ブラジャーというものをつけたことがないそうで、着物をよく着ていて、股割れショーツを履いていたそうだ。

【自製品】中国の平潭島で生まれ育った母(1972年生まれ)は、12歳ごろまでは祖母が自宅にある布で下着を作っていて、下着に鯉やお花を刺繍することで、富の象徴や願いかけという側面があったそうです。

【ブリーフ／トランクス／ボクサー】多くの男性は身体の成長に合わせてブリーフからボクサーパンツやトランクスに変える時期がおそらく10歳から12歳頃にかけてであると思う。自分は周りより比べ早い方に変えたのだが、そのことを体育の着替えの際、クラスの子たちに気づかれたことの恥ずかしさは今でも忘れられない。別にそのようなことは今となって冷静に考えてみれば恥ずかしいものではなからう。身長が伸びたことや、靴のサイズが大きかったことはむしろ誇らしかった。しかし当時は声変わりや体毛が濃くなること、つまり男らしくなることが恥ずかしくてたまらなかった。

【安定感】気がつけばボクサーパンツを履いて生きていた私ですが、中学生のある時なんらかの手違いで父のトランクスを履いてしまった時があり、これまで味わったことのない締めりのなさに不安感を抱いた記憶があります。父のものという事でサイズが大きかったのもありますが、とにかく下がフリーの感覚というのは落ち着かなかったです。

【解放感】下着という自分とは幼い頃からずっとボクサーパンツを着用していましたが、いつの日か初めてトランクスを履いた時、その優れた通気性と締め付けの少なさに少しばかりの感動を覚えたような記憶があります。

【初めてのブラ】中学生で初めてホック付きのブラを着たとき、いったい何のメリットがあってこんなブラジャーがあるのか理解に苦しんだことを覚えている。着用が煩わしいのはさることながら、薄手の服を着れば目立つ、寝転がれば痛い。可愛いデザインにあこがれる気持ちもあったが、こんな思いを日がな一日するくらいなら一生スポブラのままでもいいと思った。ホック付きブラジャーのメリットは、男性から見た脱がせやすさとエロさ以外にない。

【寄せて上げる】私はこれまできちんとした下着を買わずに、タンクトップやブラトップしか着ていませんでした。この3月に大学生活の準備をするということで、初めて採寸までしてもらって自分用のブラを買ってもらいました。その際、寝る時用や活動時用など、場面に合わせて作られているものを多く目にしました。これまでエチケット的な認識であった下着の機能性に驚きました。

【ブラトップ】普段の下着は近くのユニクロで買ったブラトップを着ている。ワイヤーのブラもいくつか持っているが、ブラトップのほうが着やすく肌触りもいいのでめったに着ない。ワイヤーブラは色や柄の種類が豊富で選ぶのは楽しいが、着るのは面倒くさいのでつい楽なブラトップばかり着てしまう。ワイヤーブラのほうが見た目はかわいいので、旅行や学校の宿泊行事など、家族以外の誰かがいる場所で着替える機会があるときに着たりしている。

【勝負下着】私の高校の剣道部には勝負下着といううすら気持ち悪い文化があり、団体戦の試合の日にはチーム全員が赤い下着を身につけて試合にでるのです。下着の色のチョイスは顧問の独断と偏見。県大会の前日に顧問が部員全員分の(応援要員分も)赤下着を買ってきて、部員一同ドン引きしたのを覚えています。しかし勝負下着を着用してみると不思議なもので、チーム全員が同じ下着を履いているという事実が、試合に臨む私の背中を確かに押しているように感じました。

【アイロン】祖母は、パンツにアイロンをかける。気が引き締まるかららしい。その娘にあたる母は、かけない。むしろ嫌がっている。祖母の家に泊まるとき、アイロンされたパンツをはくが、確かにシャッキリした気分になる気もする。個人的には愉快なので気に入っている。

【ふんどし】地元大分県臼杵市では、農業の神と水の神にささげる相撲大会が開催されていました。私はその大会に出場し、ふんどしを身につけました。感想としては、ふんどしは結構固く、人間の弱点を守るのには非常に有効だと思った反面、現在の下着と比較すると、用をたすときに少し不便だと感じました。

【部活等】陸上女子のセパレートタイプのユニフォームの形状は下着と大差ない。しかし、下着姿を見られるのは抵抗があるのに対して、ユニフォーム姿を見られるのは抵抗がない。ただしそれも大会の時だけで、高校の体育祭の部対抗リレー等で着るのは少し恥ずかしい。これは周りの人の格好の問題だろう。下着姿に近い格好でも、それが多数派の環境なら恥ずかしさは軽減されるのではないか。結局のところ他人からの見られ方を気にするのが人間なのだろうと感じた。

【和装】はじめて浴衣を着たとき、祖母が着方を教えてくれたのですが、はじめて肌襦袢というものを知りました。薄い浴衣のような感じで、最初は何のために着るのかよくわかりませんでした。祖母によると、和服を着るときは体の凹凸が目立たないようにするのが基本で、現代では凹凸のない下着の上に汗や皮脂を防ぐための肌襦袢を着るそうです。

【校則】私の小学校では、制服のカッターシャツや体操服が白色で透けるからという理由で、下着は柄無しの白色のみと決まっていた。幼稚園の頃はお気に入りのキャラクターのシャツを着ることができていたのに、小学生になるとただの真っ白のシャツを着なければならなくなったのを不満に思ったことを覚えている。母に聞いてみると、母の時代もキャラクター付きのシャツはあったが、やはり小学校では無地のみ着用可という校則があったようだ。